

## 第16回国際草地学会議への出席および研究発表 「フランスの草地畜産視察」

岡 本 明 治

草地学科草地利用学研究室

### 1. 目 的

第16回国際草地学会議への出席・発表およびフランスの草地畜産視察

### 2. 期 間

1989年10月4日～10月16日

### 3. 場 所

ニース (フランス)

### 4. 内 容

#### a) 第16回国際草地学会議への出席・発表

国際草地学会議 (International Grassland Congress) は、4年に1回開催される国際会議で、1985年の第15回会議は日本の京都で開催され、今回の第16回会議はフランスのニースにあるACROPOLIS国際会議場で行われた。10月4日、オープニングセレモニーにおける Dr. J. Picard の開会宣言により7日間の会議が始まった。一般講演は、14のセクションに78カ国より823課題、約1,200名の参加があった。日本からは約40名の参加であった。セクションの内容と講演課題数は、

1. 土壌と牧草の栄養	60 題
2. 窒素の固定, 循環と利用	33 題
3. 育種: a. 遺伝資源と種の評価	
b. 育種方法と選抜基準	128 題
4. 生長と生産性: a. 生理学的	
b. 耕作技術的	92 題
5. 種子生産	30 題
6. 草地生産における生物学的制限要因	30 題
7. 牧草の栄養価と消化性	100 題
8. 牧草の貯蔵と物理化学的加工	31 題

9. 植物機構と生態生理：植物と動物の関係	51 題
10. 草地からの家畜生産	86 題
11. 草地農業システム	38 題
12. 草地の評価と分類：土地利用方法と潜在的生産性に対する評価の方法	42 題
13. 不良環境における草地と野草地の生産、利用：a. 寒冷、山岳、亜寒帯環境	86 題
b. 温暖、地中海、亜熱帯環境	
14. 多目的土地利用としての草地：土壤保全、環境保護	16 題

であった。その他会期の中間に小集会（ワークショップ）が6課題について開かれた。また、最終日の前日にファーマーズホールがもたれた。私のポスターによる発表は後半の2日間であったので、それまでは関係する分野の講演やポスターをゆっくりと聴いたり、見たりすることができた。言葉を理解する力が不十分なために講演内容は概略しか理解出来なかったが、ポスター発表については発表者と有意義な情報交換の機会を持つことが出来た。

ディスプレイの方法についても当日マジックペンでなぐり書きしたようなものから、制作を専門家に依頼したようなものまであり、それぞれのお国柄や、発表者の個性が出ていて興味深いものがあった。そうした中で、アフリカや東欧諸国の研究者の俊しい、工夫に富んだ研究手法や発表に胸を打たれ、条件や費用ばかりに目がいく日頃の自分自身が反省させられた。こうした中で9日の発表日を迎えた。指定された時間に指定された場所に行くと、事務局のミスで私の発表するボードが用意されていないことがわかった。交渉の結果、やっと場所を準備してもらい日本から持ち込んだ。「育成牛の生長と栄養摂取における放牧の効果」についてのポスターを貼ったが、一時は発表出来ないのではないかと不安であった。4年前の京都での見事な運営に比べ、善かれ悪しかれ大らかな、大雑把な運営方法であった。今回の経験から不当な事柄に対しては泣き寝入りをしてはいけないこと、言葉が少々通じなくてもクレームをつけることの大切さを痛感した。このように苦労してもらったボードはコーヒーや紅茶のサービスコーナーに近いこともあって予想外に多くの人々から質問をうけた。なにが幸いになるか判らないものである。

今回の国際会議の発表演題から研究の傾向を考えるとバイオテクノロジーを使った育種技術。生理学的な基礎研究。微生物を使った栄養評価。放牧による家畜生産。不良環境や、環境保全における草地の役割。等が今後の研究の中心課題になると考えられた。

会議の合間に風光明媚で有名なニースの海岸や、美術館をめぐる。地図の上でしか知らなかった地中海を目のあたりにしてその美しさに感動した。ニースには4つの美術館があり、その内のシャガールとシェレット美術館を見学したが日本ではなかなか見ることの出来ない作品がさり気なく、多くの作品に埋もれるように展示してあるのに驚いた。

#### b) フランスの草地畜産視察

今回の学会参加の機会にフランス北西部のブルターニュ、ノルマンディ地方の酪農家を視察した。この地方は北を英仏海峡、西を大西洋に囲まれた地域で、暖流の影響を受けて気候が比較的温和であり（ライグラスが栽培されている）フランス酪農の中心地でもある。飼養されている乳用牛の種類は、ホルスタイン、フランス・フリージアン、ノルマンディー等であった。経営規模は50-60ha、出荷乳量300-350t/年間で、1頭当り平均産乳量は8,000-9,000kgで十勝地方の平均的な酪農家に

近い。これらの酪農家の飼料基盤は、放牧とトウモロコシサイレージが中心であり、自家生産飼料を最大限に利用して生産費を下げる努力をしている。一方、これらの酪農家にも悩みがあり、後継者となる筈の若者が休暇の少ない労働や、刺激の乏しさを嫌い都市へ出て行く傾向にあり、当然、後継者の結婚相手も少ないという日本と同様の問題を抱えている。しかしながら現実の経営者は非常に明るく、周りの景色に融けこんだ歴史を感じさせる家屋で生活を楽しんでいるように思われた。

私にとって初めてのヨーロッパ大陸、しかもフランスへ学会出席の機会を与えてくださった大学関係者の皆様に、また、多大なご援助を賜った後援会に心から感謝を申し上げます。